

## み言葉の実現

イザヤ61:1

ルカ4:16~21

海老名教会もいよいよ公の礼拝の再開です。今、ここに集い見えないみ言葉が語られ、聴かれるのです。来月には見えるみ言葉である聖餐も味わえることとなります。それでもやはり集団感染に対する予防は欠かさず、マスク、手洗い、ソーシャルディスタンスなどはお勧めしています。会堂でお座りになられる際にも、おそらく何人の方は御自分の決まった席みたいなどころがあるかもしれません。仲良くお隣同士で座られていた方々もいたでしょう。けれども一応一つずつ席を空けて座っていただくこととなりました。人との距離において物理的距離と心理的距離が関係するとすれば少し寂しい思いもします。それでも、これからも教会員同士が主にある深い交わりが与えられることと確信しています。

2千年ほど前のイエス様の時代においても、あちらこちらに会堂があり安息日になるとその町の人たちは一つ所に集まってきて、そこで語られるみ言葉と聴いていました。イエス様も小さい時から両親と共にそこに出席していたことでしょう。また年に何回かある大きな祭りでは、唯一の神殿があるエルサレムまで上京していました。確かにイエス様の少年時代の記事は少ないのですが、その際少年イエスが境内で語り両親が捜した出来事は福音書にも記されています。イエス様も大きくなってナザレを離れますが、帰京した折、安息日に懐かしい会堂を訪れました。私どもも、大人になって故郷を離れてから、帰省した折に、自分の幼い頃、若かった頃通っていた教会の礼拝に出ることがあります。私どもの教会ではだれでもすぐに講壇に立って語るということはありませんが、イエス様の時代の会堂ではそれほど縛りはきつなく、誰もが聖書を読み語ることができたようです。

イエス様は力ある恵み深い言葉を語られました。みんなの目が引き付けられました。それにより多くの人たちが驚きとともに感動しました。しかし全員ではありませんでした。それは先日ペンテコステ、聖霊降臨日に使徒言行録を共に読みましたが、そこでの出来事で、様々な言葉で神様の偉大な御業が語られていて、皆が理解できているのを畏れと驚きで讃美する人たちもいれば、またそれは新しい酒に酔っているのだと嘲笑する人たちもいたということを思い起こします。イエス様が語られたことについて最初は驚いて感動したけれどもそのうち何だあれはというような声も出てきたのです。その人たちは地元の人なので、幼い頃のイエス様を知っていたのでしょう。あれはヨセフのところの大工の息子ではないか。うちの庭の柿、イチジク畑のブドウをとって食べていた餓鬼ではないか（イエス様はそんなことはしなかったと思いますが）。私どもはしばしば、語られる言葉が、その人を見たり知ったりすることによって曇りがかかることがあります。ところが逆にどこかの有名な大学教授やノーベル賞受賞者が語ったとすれば、それが大した内容でなくても箔がついて聞こえてしまうことが多いかもしれません。同じ言葉でも誰が発するかによって色眼鏡で見て受けとめてしまうのです。色眼鏡を外すことはなかなか難しいのです。むしろ色を付けて見てしまったものを補正するのが良いのかもしれない。

当時シナゴグ（ユダヤの会堂）での礼拝がどのように行われていたかはおおよそ知られています。「聞け、イスラエルよ」で始まり祈りの後に聖書朗読が続いたようです。聖書(旧約)は初めにモーセ五書が読まれ、その後に預言書が読まれました。ここで注目したいのは聖書が読まれてその後すぐにイエス様が語られたということです。私どもも今は簡素化した礼拝を行っています。礼拝に何を取り入れ（説教や聖餐式は当然ですが）その順序はどうするのかということについて絶対にこれが正しい、こうでなければならないというものではありません。それぞれの教会の伝統もあれば、この方がより良いのではないかという判断の下で行われているのが普通だと思います。例えば海老名教会でもみ言葉の朗読や説教が語られる前に献金をおささげしますが、それは語られたみ言葉の感動により情緒的な気分左右されてはいけないということだと思いますし、旧新約聖書の朗読のすぐ後に説教が語られるのは、説教がまず聖書の言葉から、聖書の言葉について証しされるべきであるということでありましょう。今日の新約の箇所からもわかりますが、実際にイエス様はイザヤの巻物を朗読してからすぐにその聖書のみ言葉について話し始められました。預言者イザヤは神の霊を受けて預言します。貧しい人に福音を告げ、

捕らわれている人に開放、見えない人に視力の回復、圧迫されている人に自由をもたらすという救いのためにその福音を届けるために、主がその人に（私に）油をそそがれた。メシア、キリスト。その油注がれた者メシア、キリストによって主の恵みの年が告げられるのだ。

イエス様が講壇に立つと、皆は興味津々でいったいどのようなことを語るのだろうと見つめます。イエス様は言われます「この聖書の言葉は、今日、あなた方が耳にしたとき、実現した。」イザヤの預言の言葉が今日、ここで実現したということです。主によって油注がれたキリスト・イエスによってこの預言書の言葉が語られそして聞かれた今日、今、ここで主の恵みによる救いが実現したということです。キリストが（旧約）聖書そのものについて語り、まさにその油注がれたキリストが語ることによって預言が成就したのです。そしてその語られた言葉が聞いた人の耳に充満し、反響し続けたのです。私どももそれぞれかつてある語られた言葉が、声が今もありありと耳に残っていてすぐに思い起せるようなことを経験したことがあるでしょう。み言葉が語られ、そこで聴かれることによって出来事は起こります。解放、快復、回心、自由。出来事が起こるといえるのは、そのことによって事態が変わるということでもあります。そうでなければ出来事にならない。かつてイザヤを通して預言された言葉が、今、キリストによって語られ、人々に聴かれ、実現し、変わったのです。その「主の恵みの年」がその「今日」であったのです。しかしここで考えてみてください。出来事が起こる、癒されるというのがイエス様の今日語られた言葉によるのなら、安息日に掟破りの業が行われたこととなります。私どもは知っています、イエス様こそ安息日の主であることを。しかしこの聴衆はまだそのことが分からないのです。彼らはユダヤ教徒であり、ユダヤ社会の人たちでした。それゆえに新しく現れたメシア、それも幼い頃の姿を知っているメシアを自分たちの基本的な律法の枠を超えるお方だとは考えられなかったのです。しかし今語っておられるイエス様において、神の救いが実現している、神の言葉が成就しているのです。

私どもも今日から公の礼拝を再開しました。今日この会堂のみ言葉が語られ聴かれています。目には見えないキリストの現臨の下で、見えない主のみ言葉が語られ、聴かれることによって新たな主の恵みの年が始まったのです。それは今日であり、今であります。そして救いの出来事が告げられた今、私どもはその福音を聴き新たに主の道を再び共に歩み始めるのです。もしかするとコロナ禍以前とは違った形になるかもしれません。もちろん教会だけでなく社会全体が変容してしまうかもしれません。しかしたとえ世界がどのように変わっても、主の言葉はそれ自体変わらずにこの世に響き渡ります。その言葉が語られ、聴く者が集って礼拝をささげ続けるでしょう。この教会が海老名の地にあつて、変わらぬ主のみ言葉がここで語られ、聴かれ続けることを確信しつつ再び共に歩みましょう。